

夏補習 (助動詞特講) ④

● p50 助動詞12 「なり」 (伝聞・推定) ● p51 助動詞13 「なり」 (断定)

補足

終止形接続の「なり」が「推定」になるのはどんな時か、次の例文を参考にしながら説明せよ。
 (例) 秋の野に人まつ虫の声なり。
 音に關係する語が近くにある時。

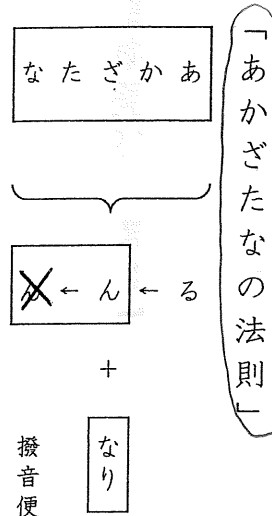
補充

「なり」の識別 梓困みの説明として適当なものを、左の語群からそれぞれ選べ。
 「ナルと詠せよ」動詞 ↓ 形容動詞の活用語尾

- 1 春になり、花が咲く。 (音) 断定
- 2 中宮、いとあてなり。 (音) 断定
- 3 夢にも人に会はぬなり。 (音) 断定
- 4 タされば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里 (音) 推定
- 5 物語の多くあなり。 (音) 伝聞

a 断定の助動詞 b 伝聞の助動詞 c 動詞 d 推定の助動詞 e 形容動詞の活用語尾

補充



撥音便化・撥音便化無表記の時は 伝聞か推定(断定にならない)

テキスト掲載問題より

▼ 伝聞・推定の助動詞「なり」に傍線を引き、その文法的意味を答えなさい。

- 7 御衣の音なひ、「さばかりなり」と聞きあたまへり。 (音) 推定
- 8 「荻の葉、荻の葉」と呼ばすれど、答へざなり。 (音) 推定
- 9 また聞けば、侍従の大納言の御女、亡くなり給ひぬなり。 (音) 伝聞
- 10 駿河の国にあなる山の頂に、 (音) 伝聞

▼ 断定の助動詞「なり」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

女もしてみむとてするなり。 (音) 断定

「さらば、その遺言なりなりな。」 (音) 断定

遺言下あるように

×8は「あかざたなの法則」を適用できる。

京(にいる)女 (音) 断定

京なる女のもとに、 (音) 断定

存在

断定なり(音) 撥音無表記

結いば省略されて、いるので、補って考える。

断定なり(音) 思ひ始めたのだらうか。

●p52 名作に親しむ『土佐日記』冒頭文 ④ 助動詞をのぞき、石横に意味を記せ。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。
 伝聞 意え 断定
 それの年の、十二月の、二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよし、いささかにも
 のに書きつく。

ある人、県の四年五年はてて、例のこともみなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、
 船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろ、よく比べつる人々なむ、別れ
 がたく思ひて、日しきりに、とかくしつつののしるうちに、夜ふけぬ。
 当然 予定 打消 完了
 二十二日に、和泉の国までと、平らかに願立つ。藤原のときぎね、船路なれど、馬のはなむけす。
 存続 断定
 上中下酔ひ飽きて、いとあやしく、塩海のほとりにてあざれあへり。

●p54 助動詞14 「めり」

補足 「めり」の訳はとにかく「ようだ」。
 テキスト掲載問題より

▼助動詞「めり」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。
 7 かぐや姫の、皮衣を見ていはく、「うるはしき皮なめり。」
 推定 立派な皮であるようだ
 断定なり 挿 無表記

●p55 助動詞15 「まし」

補足 「くせば、…まし」の「せ」をめぐって
 補足 中世以降、「推量」(くだろう)の意味で「まし」が使われる例も出てくる。

テキスト掲載問題より

▼助動詞「まし」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。
 7 入りたらましかば、「みな射殺されなまし。」
 受身強意 受身 後意 みな ぎと射殺されてきた
 8 いかにせまし。
 どのようになしようかしら。 (たのらひの意志)
 9 夢ど知りせば 醒めざらましを 夢ど知っていたらば 目覚めなかつた
 たらふのい

●p56 助動詞16 「まほし」

補足 願望の助動詞として他に「たし」もあり。

▼助動詞「まほし」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。
 9 この宮仕へ本意にもあらず、巖の中にこそ住まほしけれ。
 巖の中に住みたい。

夏補習 (助動詞特講) ⑤

● p58 名作に親しむ 『大鏡』 冒頭文 ⑧ 助動詞を〇で囲み、右横に意味を記せ。

先つ頃、雲林院の菩提講に詣でて侍りし^{過去}かば、例人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁

二人、^{過去}姫と行きあひて、同じ所に居ぬ^{強意}めり。『あはれに、同じやうなるもの^{断定}のさまかな』と見侍

りし^{過去}に、これらうち笑ひ、見かはして言ふやう、「年頃、『昔の人に対面して、いかで世の中の見

聞く事どもを聞こえあはせ^{意志}む。このただ今の入道殿下の御有様をも申しあはせばや』と思ふに、

あはれにうれしくも会ひ申したる^{完了}かな。今ぞ心やすく黄泉路もまかる^{可能}。おぼしき事言はぬ^{打消}は、

げにぞ腹ふくるる心地し^{詠嘆}ける。『かかればこそ、昔の人はもの言はまほしくなれば、穴を掘りて

は言ひ入れ侍り^{完了}けめ』とおぼえ侍り。かへすがへすうれしく対面したる^{完了}かな。さてもいくつにか

テキストでは「なる」を断定と取り
いるが「やうなる」は比況という
意味の助動詞と取ることが出来る。

テキストでは「過去推量」となっていますが、
「おぼしき事言はぬは」に「おぼしき」が書かれています。
「おぼしき」は「おぼし」の推量形です。
「おぼし」は「おぼしき」の推量形です。
「おぼしき」は「おぼし」の推量形です。
「おぼしき」は「おぼし」の推量形です。

再掲につき、略。「前期分」を参照してください。

最後に再掲 (1) 次の各文の枠囲みについて、助動詞はその意味を答えよ。助動詞でない場合は×をつけよ。
(2) 各文を現代語訳せよ。

① 死に^にし^し子、顔よかりき。

② 心なき身にもあはれは知ら^れけり。

③ あたら夜の月と花とを同じくは心知れ^らむ 人にみせばや

④ 春立てば消ゆる氷の残りなく君が心は我に解け^なむ

⑤ 古き塚はすかれ^て田となりぬ。

⑥ 堂の物の具を碎け^るなりけり。

⑦ やがてかけこもら^ましかば、口惜しから^まし。

⑧ 女のえ得ま^まじかりけるを、年を経てよばふ。

⑨ 主を見^{たら}ば、告げよ。

⑩ 女房にも歌詠ま^せ給ふ。